多治見方言における動詞のアクセント（1）

安　藤　智　子

富山大学人文学部紀要第 64 号抜刷
２０１６年２月

多治見方言における動詞のアクセント（1）

安　藤　智　子

0. 本稿のねらい

多治見市を含む岐阜県南東部（東濃地方）の方言は，東京式アクセントを持つ。東濃地方のうちでも南東部は中輪東京式アクセントを持つことが指摘されている（金田一 1977, 山口 1984 他）が，この地域を除く岐阜県の大部分は内輪東京式とされる。しかし，内輪式／中輪式の特徴を持つ地域を分ける境界線はすべての特徴について一致するわけではなく，一つの地点においてある項目で中輪式のアクセントを示しながら別の項目では内輪式のアクセントを持つということも少なくない。

安藤 (2014) では，1 拍二類名詞について，多治見市中心部をほぼ東西に流れる土岐川の右岸（北側）が内輪式，左岸（南側）が中輪式であり，東部の川沿いの地域にはその混じった状態が見られることが明らかになった。一方で，金田一 (1978) が内輪式・中輪式等の違いを端的に示すとしている 3 拍三類の「力」については，調査対象者 34 名中 33 名が内輪式の特徴である中高型で発音しており，市内に境界があるとは考えられない結果となった。

内輪式・中輪式の区別に関わる項目としては，他に，形容詞と動詞が指摘されているが，形容詞終止形は市全域で一類・二類ともに起伏式となっている（詳細は稿を改める）。

本稿では，多治見方言における動詞のアクセントを，活用形を含めて検討する。多治見市方言アクセントが内輪式・中輪式の 2 つの体系の狭間でどのように位置づけられるかを探り，さらにこの地域の特徴を炙り出す目的で，内輪式とされる名古屋方言および中輪式とされる岡崎方言との比較を中心に報告する。

1. 周辺地域の動詞アクセントに関する先行研究

1.1 内輪東京式と中輪東京式の動詞における相違

前節で述べたように，岐阜県の東京式アクセントを持つ地域のうち，ほとんどの地域が内輪東京式アクセントを持つとされるが，金田一 (1977) 等の分布図によれば東濃地方の南東部（恵那市南部・中津川市南部）には東京と同じ中輪東京式の地域がある。東濃地方のアクセントの研究は，名詞に関しては奥村 (1976)，山口 (1992) などいくらかあるが，動詞については非常に少なく，特に終止形以外の活用形を扱ったものは恵那郡付知町のデータを示した山口 (1993) くらいとみられる。一方で，美濃地方の南側に接する愛知県のアクセントについては，内輪式の名古屋市など尾張地方，中輪式の岡崎市など西三河地方，外輪式の豊橋市など東三河地方の

詳細な研究が，山口 (1984, 1985, 1986, 2003)，山田 (1987, 1992, 1999, 2002)，山田・正木 (1999)，鏡味・横江 (1992) など多数行われてきた。東濃地方のアクセントを考える上で，共通語（東京方言）より活用形の語形の近い愛知県の各方言の研究は，西濃地方（杉崎 2005 他）のそれと並んで参考になる点が多い。そこで，本稿では，こうした近隣方言に関する先行研究を比較の対象とする。なお，共通語化について考える際には東京の中輪式に言及する必要があるが，山口 (2003: 117) や秋永 (2001) を参照する限り，動詞の活用形のアクセントに関して東京と岡崎との差異は少ないと見られるので，東京との比較は岡崎との違いのある項目や岡崎のデータが得られない形式についてのみ行うことにする。

動詞終止形については，柴田 (1950) において，名古屋と岡崎で 3･4 拍の一段活用動詞「明ける」「借りる」「捨てる」「負ける」，「生れる」「始める」「忘れる」のアクセントが異なることが指摘されている。金田一 (1974) でこれらの動詞は「第 1 類」に属するものとされる。すなわち，内輪式と中輪式の違いは，3･4 拍一類一段活用動詞終止形における核の有無であり，山口 (1984) の示す表から動詞に関するところを抜き出せば表 1 のようになる。以下，原則として，アクセント型を，アクセント核の位置を語頭から数えた拍数の囲み数字によって示す（⓪は平板型）。

表 1　内輪式と中輪式・外輪式の動詞に関わる相違点（山口 (1984: 12) による）

品詞＼拍	内輪 三	内輪 四
1 類一段動詞	②	③
2 類一段動詞		

中輪，外輪 三	中輪，外輪 四
⓪	
②	③

これについて山口 (1984: 12) は，「部分的にとらえれば 1 類語に関する異同であるが，体系的にとらえれば中，外輪に存在する型弁別が内輪にはないということで注目すべきものである」と述べている。

さらに，山口 (1984, 1985, 1986) は終止形以外の活用形についても愛知県内の調査結果をまとめており，山口 (2003) は内輪式の名古屋市旧市内（以下，単に名古屋とする。同市中区丸の内旧呉服町 1924 年生まれのはえぬきの話者の体系）および中輪式の岡崎市（同市明大町（欠町 1919 年生まれ）の話者による）等のアクセントをまとめ，比較を行っている。それに基づいて作成したのが表 2 であるが，山口 (2003: 121, 124) では 2 つの地域を別々の表で示していたものを，統合して示す（山口が現代語について「四段動詞」と称するものは，以下では引用部分を除き「五段動詞」とする）。元の山口 (2003: 124) が示した表では，名古屋では 3・4 拍一段動詞に一類／二類の区別がないものとして，同じ列に入れて扱っているが，ここでは岡崎と比較するために語類によって表を分ける（表 2-1，表 2-2）。ただし，山口 (2003: 124) の表では，問題の 3･4 拍一段動詞を中心に，名古屋で 2 つの型が挙げられている項目がある。これが，

部分的に語類によって異なることを示すのか，それとも一類か二類かにかかわらず見られるゆれを指すのかが明示されていない。このことの扱いについては 3.3 節と 3.5 節で検討する。

3･4 拍一類一段動詞は，表に挙げられた多くの活用形において内輪式（名古屋）と中輪式（岡崎）の間で違いを見せる。さらに，その他の一類動詞でも，接続助詞トやデ（共通語で言えば接続助詞カラに相当する，理由を示す助詞）に続く B 接合形，「～に行く」等（名古屋では「売リニク」岡崎では「売リーイク」等）に相当する I 連接形，助動詞タイに続く M 希望形において違いが見られる。一方，E 未来形（意志形）はどの語でも違いが見られない。興味深いのは，五段動詞のうちイ音便活用する語にのみ地域差が現れる F 過去形，G 中止形（いわゆるテ形），H 中接形（中止＋ 1 拍助詞接合，共通語で言えばテハ，テモ等に続く）である。山口 (2003) は名古屋についてはイ音便活用と非イ音便活用の両方のデータを挙げているが，岡崎のデータでは違いがないものとしてどちらか一方しか挙げていないので，表 2-1 ではイ音便／非イ音便にまたがる形で示す。

表 2-1　一類動詞の活用形アクセント（名古屋／岡崎）

			五段動詞						一段動詞		
		拍数	2		3		4		2	3	4
活用形	地域	語形の例	売る	咲く	歌う／囲む	続く	始まる	働く	着る	負ける	並べる
A 終止	名古屋	ウル。	⓪		⓪		⓪		⓪	②	③
	岡崎		⓪		⓪		⓪		⓪	⓪	⓪
B 接合	名古屋	ウルト、ウルデ等	⓪		⓪		⓪		⓪	②	③
	岡崎		②		③		④		②	③	④
C 接二	名古屋	ウルナラ、ウルマデ等	③		④		⑤		③	②	③
	岡崎		③		④		⑤		③	④	⑤
D 仮定	名古屋	ウリャ、キヤ	②		③		④		②	②	③
	岡崎	ウリャー、キリャー	②		③		④		②	③	④
E 未来	名古屋	ウロ、キヨ	②		③		④		②	③	④
	岡崎	ウロー、キヨー	②		③		④		②	③	④
F 過去	名古屋	ウッタ、キタ	⓪	①	⓪	②	⓪	③	⓪	②①	③②
	岡崎		⓪		⓪		⓪		⓪	⓪	⓪
G 中止	名古屋	ウッテ、キテ	⓪	①	⓪	②	⓪	③	⓪	②①	③②
	岡崎		⓪		⓪		⓪		⓪	⓪	⓪
H 中接	名古屋	ウッチャー、ウッテモ等	③	①	④	②	⑤	③	②	②①	③②
	岡崎		③		④		⑤		②	③	④
I 連接	名古屋	ウリニク	⓪		⓪		⓪		⓪①	⓪②	⓪③
	岡崎	ウリーイク	②		③		④		⓪	⓪	⓪
J 強消	名古屋	ウレセン	②		③		④		①②	②	②③
	岡崎	ウリャーセン	②		③		④		②	②	③

K 禁止	名古屋	ウルナ	②	③	④	②	②	③
	岡崎		②	③	④	②	③	④
L 否定	名古屋	ウラン、キン	⓪	⓪	⓪	⓪	②	③
	岡崎		⓪	⓪	⓪	⓪	⓪	⓪
M 希望	名古屋	ウリタイ	③	④	⑤	②	③	④
	岡崎		⓪	⓪	⓪	⓪	⓪	⓪

二類動詞のうち，五段・一段の両タイプにわたって名古屋／岡崎の違いが現れるのは，表2-2 中では I 連接形のみである。一段動詞のみに違いがあるものとしては F 過去形，G 中止形，H 中接形，J 強消形（強い打ち消し）があるが，そのうち J 強消形は 4 拍動詞のみに違いが見られる。

表 2-2　二類動詞の活用形アクセント（名古屋／岡崎）

			五段動詞			一段動詞		
		拍数	2	3	4	2	3	4
活用形	地域	語形の例	書く	頼む	集まる	見る	受ける	答える
A 終止	名古屋	カク。	①	②	③	①	②	③
	岡崎		①	②	③	①	②	③
B 接合	名古屋	カクト、カクデ等	①	②	③	①	②	③
	岡崎		①	②	③	①	②	③
C 接二	名古屋	カクナラ、カクマデ等	①	②	③	①	②	③
	岡崎		①	②	③	①	②	③
D 仮定	名古屋	カキャ、ミヤ	①	②	③	①	②	③
	岡崎	カキャー、ミリャー	①	②	③	①	②	③
E 未来	名古屋	カコ、ミヨ	②	③	④	②	③	④
	岡崎	カコー、ミヨー	②	③	④	②	③	④
F 過去	名古屋	カイタ	①	②	③	⓪	②①	③②
	岡崎		①	②	③	①	①	②
G 中止	名古屋	カイテ	①	②	③	⓪	②①	③②
	岡崎		①	②	③	①	①	②
H 中接	名古屋	カイチャー、カイテモ等	①	②	③	②	②①	③②
	岡崎		①	②	③	①	①	②
I 連接	名古屋	カキニク	⓪①	⓪②	⓪③	⓪①	⓪②	⓪③
	岡崎	カキーイク	②	③	③	①	①	③
J 強消	名古屋	カケセン	①	②	③	①	②	②③
	岡崎	カキャーセン	①	②	③	①	②	③
K 禁止	名古屋	カクナ	①	②	③	①	②	③
	岡崎		①	②	③	①	②	③
L 否定	名古屋	カカン	②	③	④	①	②	③
	岡崎		②	③	④	①	②	③

M 希望	名古屋	カキタイ	③	④	⑤	②	③	④
	岡崎		③	④	⑤	②	③	④

また，山口 (2003) は追加項目として次の活用形を挙げている（H2 ～ H5 の形式の名称は筆者による）。

F2 過去形の仮定形（～タラ）

F3 並列形（～タリ）

H2 持続形（共通語で中止形＋イル，名古屋・岡崎で～トル）

H3 試行形（中止形＋クル・ミル）

H4 完遂形（共通語で中止形＋シマウ，名古屋で～テマウ）

H5 受益形（共通語で中止形＋モラウ，名古屋で～テマウ）

L2 否定形の仮定形（共通語で～ナケレバ，名古屋・岡崎で～ニャー）

L3 否定形の過去形（共通語で～ナカッタ，名古屋・岡崎で～ナンダ）

L4 否定形の中止形（～ズ）＋ニ

L5 否定形の連接形（共通語で～ナクテモ，名古屋・岡崎で～ンデモ）

山口 (2003: 125) は，名古屋では「補助動詞の接続形式」によって動詞の型を問わず同じアクセント型を取るものがあると指摘している。上記のうち，H2，H4，L3 は～トㄱル，～テㄱマウ，～ナㄱンダというように常に補助動詞の 1 拍目にアクセント核があり，H3 は～テクㄱル，～テミㄱルと 2 拍目にアクセント核があるが，H5 はどの動詞に付いても無核化するという。残る F2，F3，L2，L4，L5 については，同書には調査結果が明示されていないが，3.5 節，3.7 節ではこれを山口 (1985) や山田 (1987, 2002) などから補うことにする。

1.2 内輪式諸方言の比較

金田一 (1974) は，上記のように内輪式と中輪式を分ける 3・4 拍一類一段動詞の終止形について, 中輪式では平板だが, 内輪式では 3 拍語で「稀に」（同書 p.68）②型, 4 拍語で「時に」（同書 p. 71）③型になるとされる。この「稀に」「時に」がどこで，どの動詞でなのかは明らかではないが，内輪式も一様でないことが窺える。

山口 (2003) はこれを具体化し，内輪式といっても [1] a 名古屋やこれに近い愛知県一宮市，岐阜県岐阜市，同県海津郡南濃町（現，海津市）とそのほかの地域で違いがあることを指摘している。そのほかとして比較される地域は，岐阜県内の [1] b 飛騨地方のほか，[2] 奈良，三重，和歌山三県境地域（吉野，熊野山岳地帯），[3] 兵庫県但馬，京都府与謝郡など，[4] 岡山県大部（阿哲郡などの県西北部, そのほか県東部の県境地帯を除く), 広島県福山市などの県東南部，[5] 高知県幡多郡（中村市，宿毛市，土佐清水市を含む）である。山口 (2003: 130f) はこれらの分散する地域において，「1 拍名詞類別以外にもいくつか非中輪的特徴が，あたかも自然に連

動するように共存していることが注目される」とし，その「非中輪的特徴」1 ～ 4 について当てはまるか否かを表 3 のように○×等により示している。

表 3　内輪式諸方言の比較（山口 2003: 130f）

	1	2-1	2-2	3	4
[1]a 名古屋、岐阜	○	○		○	○
b 飛騨	○	×		○	○
[2]a 十津川、上下北山	×		○	○	△
b 大塔、洞川	○		○	○	△
[3]　但馬	○		○	×	×
[4]a 岡山、落合、福山	○	×		△	×
b 美作大部（津山など）	×	×		×	×
[5]　幡多	×		△	△	△

＜非中輪的特徴＞

1: 3・4 拍形容詞で 1 類（例：赤い）2 類（例：早い）が同じⓃをとる。

2-1: 3・4 拍一段動詞の 1 類（例：負ける）2 類（例：受ける）が同じⓃをとる。

2-2: 3・4 拍一段動詞 2 類が部分的（FGHI など）に同じⓃをとる。

3: 2 拍一段動詞の 1 類（例：着る）2 類（例：見る）が部分的（FGHI など）に同じⓃまたは⓪をとる。

4: 四段動詞の 1 類のある種（例:咲く）が 2 類（例:書く）と部分的（FGHI など）に同型Ⓝをとる。

ここから，内輪式の諸方言の中でも [1] を典型的なものとすれば，1 拍名詞以外に内輪式らしい特徴を示さない非典型的なもの（上表の [4] b や [5]）があることがわかる。

金田一 (1977) で示された中輪式と内輪式の境界線に近い東濃地方北東部の恵那郡付知町（多治見から北東に約 40km，現・中津川市北部）でも，山口 (1993) の動詞のデータからは [1]b 飛騨と同じ性質を持つと見られることから，より名古屋に近い多治見では岐阜市や飛騨と同様に典型的な内輪式であることが予想されるが，山口 (2003: 122) は [1] の地域を「愛知県尾張中西部（名古屋市を含む），岐阜県大部（西部の養老郡，不破郡，揖斐郡北部と東濃地方を除く）」（下線は筆者による）としている。1 ～ 4 の特徴について，4.2 節において多治見でどの特徴が該当するかを確かめることにする。

2. 調査の概要

2.1 調査語と活用形の選定

表 2 で見た山口 (2003) における内輪式の代表たる名古屋市のアクセントと，同じ愛知県の中輪式である岡崎市のアクセントを比較対象として，多治見市のアクセントの位置づけを確認

するべく，調査語とその活用形を選定する。活用形は 1.1 節で紹介した山口 (2003) の比較項目の中から，差異が予測される点を中心に選定する。調査語も原則として同書の語例を採用するが，「始まりたい」のような不自然な活用形を避けるために一部変更し，代わりに親密度の高い動詞を採用する。活用形の選定理由と調査語は以下のとおりである。

(a) 一段動詞の 3･4 拍語は，一類動詞がほとんどの活用形で内輪／中輪の違いを示すことから，比較のための二類動詞と合わせてすべての活用形を調べることにする。ここには，一類の「入れる」「並べる」，二類の「受ける」「答える」が調査語として含まれる。活用形のうち，C 接二（2 拍助詞との接合）形では，副助詞マデに接続する形を指定する。

(b) 内輪／中輪の違いが指摘されている B 接合形，I 連接形，M 希望形について，五段動詞の 2･3･4 拍語と一段動詞の 2 拍語を調査する。ここに調査語として含まれる一類動詞は「売る」「歌う」「働く」「着る」，二類動詞は「書く」「頼む」「動かす」「見る」である。ただし，B 接合形と M 希望形については，調査時間の制約のため，内輪／中輪の違いが指摘されていない二類五段動詞は割愛する。B 接合形は終止形＋接続助詞ト，I 連接形は連用形＋格助詞ニ＋「行く」とする。

(c) F 過去形，G 中止形，H 中接形については，一段動詞では一・二類ともに内輪・中輪の違いが指摘されていることから，2 ～ 4 拍の計 6 語を調査対象とする。さらに，一類五段動詞ではイ音便活用をする語において他の活用をする語と異なるアクセントが見られることが指摘されていることから，イ音便／非イ音便活用動詞として「聞く」／「売る」,「注ぐ」／「歌う」,「働く」／「固まる」または「疑う」を調べる。H 中接形については，テ形＋係助詞モを調査する。

(d) 一段動詞の J 強消形は，多治見方言において複数の形式 /-RheN/，/-jaheN/ が予測されることから，2 拍語「着る」「見る」も調査対象とする。

(e) A 終止形は上記のすべての動詞について調査する。

(f) 追加項目 F2，F3，H2 ～ H5 について，一類すべての調査語と二類の一段動詞を調査する。さらに，L2 ～ L5 について，一段動詞 3・4 拍語を調査する。

2.2 調査方法

本節では，データを収集した方法や手続きを紹介する（調査語の選定以外の点は安藤 (2014) と共通）。

調査時期：2013 年 9 月

調査対象地域：多治見市立の 13 小学校の校区のうち，新興住宅地が大半を占める北栄小学校校区および脇之島小学校校区の 2 校区を除く表 4 の 11 校区とする。

表 4　調査対象地域

小学校	位置、校区内の駅等	1934 年初頭の区分・位置
南姫	最北西部、JR 太多線姫駅	可児郡姫治村
根本	北部、JR 太多線根本駅	可児郡小泉村北部
小泉	西部、JR 太多線小泉駅	可児郡小泉村南部
池田	南西部、下街道宿場町、土岐川右岸	可児郡池田村
精華	中央北部、JR 多治見駅、土岐川右岸	可児郡豊岡町南西部
共栄	北東部、土岐川右岸	可児郡豊岡町北東部
養正	東部、土岐川左岸	土岐郡多治見町東部
昭和	中央南部、土岐川左岸および右岸	土岐郡多治見町西部
市之倉	南部、JR 中央線古虎渓駅、土岐川左岸	土岐郡市之倉村
滝呂	南東部	土岐郡笠原町北部
笠原	最南東部	土岐郡笠原町南部

調査対象者：各調査対象地域校区において生え抜きの 1934 ～ 1955 年生まれの 3 名（市之倉小学校のみ 4 名）で，合計 34 名とする。以下，個人を表 5 の記号により表示する。記号冒頭の漢字は小学校校区，数字は西暦の生年下 2 桁，末尾の m/f は性別（男性／女性）を示す。表 5 に示した生育地はすべて多治見市内の町名である。

表 5　調査対象者

記号	生育地	記号	生育地	記号	生育地
南 41f	大藪	精 37m	大正	市 41m	市之倉
南 42m	大藪	精 40m	本	市 44m	市之倉
南 50m	姫	精 44m	小田	市 45f	市之倉
根 38m	根本	共 47ma	小名田	市 47m	市之倉
根 40m	根本	共 47mb	高田	滝 40m	滝呂
根 41m	根本	共 47f	高田	滝 45m	滝呂
小 34m	小泉	養 49ma	平野	滝 48m	滝呂
小 35m	小泉	養 49mb	上	笠 46m	笠原
小 50m	小泉	養 52f	生田	笠 48f	笠原
池 36m	池田	昭 34m	田代	笠 49m	笠原
池 37m	池田	昭 41m	錦		
池 47m	池田	昭 48f	錦		

調査方法：PC 画面上に Microsoft PowerPoint により調査対象語を含む短文（読み上げ文）を表示し，読み上げを依頼する。読み上げ文は筆者の内省により方言文を用意するが，読み上げ文が被調査者の普段の言い方と異なる場合には普段の言い方をするよう求める。

記録：マイクロフォン（SONY ECM-PCV80U）を通じ IC レコーダー（Ediroll R-05）により録音する。

分析：筆者が録音を 2 度確認しながらアクセント型の聞き取りを行う。ピッチ変化が微妙な場合は SIL Speech Analyzer のピッチ曲線表示機能により判定する。

調査語選定の概要：山口　(2003) における名古屋・岡崎の記述との比較のために，できるだけこれと同じ語を取り上げる。ただし，自然度が高い短文が作りにくい場合には，杉藤 (1990) などを参考に，他の親密度の高い語を調査に用いる。親密度の判定には天野・近藤編著 (2003) NTT データベースシリーズ『日本語の語彙特性』に採録されている語の「単語親密度」のうち主として「文字音声親密度」を用いる。被験者に示す表記もこれに従い，複数の表記がある場合は親密度の最も高い表記を用いる（さらに誤読の恐れがある場合には読み仮名を括弧に入れて示す）。

3. 調査結果

本節では，活用形ごとに調査結果を報告し，これを表 2 に示した山口 (2003) による名古屋の内輪式アクセントおよび岡崎の中輪式アクセントの記述と比較する。以下表 6 ～ 12, 17, 18, 20, 21 では，調査項目のうち名古屋と岡崎のアクセントが異なるものを中心に，多治見の調査結果と並べて表示するが，「調査語形」の欄には多治見での調査語の活用形を記し，山口 (2003) が名古屋・岡崎について示した語例がこれと異なるものについては括弧内にそれを示す。「拍数」の欄には終止形の拍数を示す。

3.1 終止形

1.1 節で見たとおり，A 終止形では，3 拍・4 拍一類の一段活用動詞において内輪式／中輪式に違いが指摘されている。

すなわち，3 拍の「入れる」，4 拍の「並べる」は内輪式＝有核，中輪式＝無核という違いがあるが，名古屋の内輪式の有核型（イレ˥ル，ナラベ˥ル）について，前川 (1957) や金田一 (1978) は過去形からの類推で新しく生まれたものと見ている。多治見ではほとんどが無核であった（表 6）ので，この点については，現状を見れば圧倒的多数が岡崎中輪式の型を示していると言えるが，名古屋の有核型が新しいものだとすれば，これをもって多治見が伝統的に中輪的性格を有すると指摘することはできない。なお，多治見の調査において有核を示した少数の調査対象者は 3 拍語と 4 拍語で一致していないが，市南部には分布していないという共通点がある。

また，一類一段動詞のうち 2 拍の「着る」については，内輪式・中輪式ともに⓪型であり，多治見でも全員がこれに同じであった。

表 6　A 終止形：3・4 拍一類一段動詞

拍数	調査語形	名古屋	多治見		岡崎
3 拍語	入レル（負ケル）	②	② 4	⓪ 30	⓪
4 拍語	並ベル	③	③ 2	⓪ 32	⓪

一方，一類の五段動詞は名古屋・岡崎ともに無核とされるが，多治見で調査対象者全員が無核だったのは 2 拍語「聞く」（比較対象の山口 (2003) では「咲く」）のみである。表 7 に示すとおり，3・4 拍のイ音便活用動詞では，多治見において少なからぬ有核が聞かれた。3 拍語「注(そそ)ぐ」の有核は市全域に分布するが，調査対象者から「あまり使わない言葉であり，ふだんは『つぐ』『いれる』などと言う」という意見があったことから，類への所属がはっきりしない語である可能性がある。4 拍語「働く」の有核は西部（南姫小学校，小泉小学校，池田小学校校区）には分布しておらず，中央～東部にかけての 22 人中では半数が有核である。

表 7　A 終止形：3・4 拍一類五段イ音便活用動詞

拍数	調査語形	名古屋	多治見		岡崎
3 拍語	注グ（続ク）	⓪	② 31	⓪ 3	⓪
4 拍語	働ク	⓪	③ 11	⓪ 23	⓪

イ音便活用以外の「売る」「歌う」「固まる」は，多治見ではほぼ全員が無核で，名古屋および岡崎の型と同じである（「疑う」で共 47m,「固まる」で精 37m および小 34m が③型）。

二類動詞の終止形は名古屋・岡崎が同じであり，五段・一段動詞ともに語末から 2 拍目にアクセント核があるが，多治見においてもこれは同じであった。

3.2 接合形（～ト）

接続助詞トに続く B 接合形では，一類動詞では五段・一段動詞ともに名古屋／岡崎の違いが指摘されている [1)]。表 8 に一類動詞の調査結果を示すが，ここでは多治見を 3 列に分け，左列に名古屋と同じ型, 右列に岡崎と同じ型を示し, 中央列にそれ以外の型および NA（回答なし，もしくは別の動詞を用いるとの回答）の人数を表示する。全体としては岡崎と同じ型が多いことがわかる。

表 8　B 接合形：一類五段・一段動詞

活用	拍数	調査語形	名古屋	多治見			岡崎
五段	2 拍語	売ルト	⓪	⓪ 1		② 33	②
	3 拍語	歌ウト（囲ムト）	⓪	⓪ 4	NA1	③ 29	③
	3 拍語	注グト（続クト）	⓪		② 30, NA1	③ 3	
	4 拍語	働クト	⓪	⓪ 5	③ 7	④ 20	④

一段	2 拍語	着ルト	⓪	⓪ 1		② 33	②
	3 拍語	入レルト（負ケルト）	②	② 1	⓪ 6	③ 27	③
	4 拍語	並ベルト	③	③ 2	⓪ 7	④ 25	④

ただし，多治見では名古屋にも岡崎にもない型が見られる語がある。前節においてA終止形でどちらの型とも異なるアクセントとなる人が一定数いることが示された「注ぐ」「働く」がそれであり，それぞれA終止形で見られた②，③型がこのB接合形にも表れている。「注ぐ」「働く」のB接合形でそれぞれ②，③型をとる人全員がA終止形で②，③型をとっている。

なお，「入レルト」「並ベルト」に見られる⓪型は名古屋にも岡崎にもない型であるが，秋永（2001）に示された共通語型である。しかし，⓪型で発音した人は皆男性でどちらかといえば年齢が高く，地域的分布を見ても中央部は昭24mの1名のみであることから，共通語化が進む要因はないように思われる。

これに関連して，山田 (1987) は，3･4拍一類一段動詞のA終止形およびそれにト（B接合形）やマデ（C接二形）などの助詞が接続する語形について，名古屋では中高型借り㋕ル（ト･マデ），ナラベ㋕ル（ト・マデ）等が高齢者ほど少なくて若い人ほど多くなりつつあることを指摘している。また，1950年の調査では中高化が「名古屋の南部に多く北部はそれほどでもなかった」（山田 1987: 66）という。この記述から，名古屋ではもともとA終止形･B接合形ともに無核であったことが窺え，北東方向にある多治見でもそうであった可能性がある。実際，3.1節で見たようにA終止形は現在も多治見において無核が圧倒的であり，同じく終止形が無核の岡崎と同様に，無核の語幹との接続では多くの話者がBで助詞トの直前にアクセント核を置くようになったと見られる。

二類動詞はB接合形でも名古屋／岡崎の違いはないとされており，今回調査した一段動詞「受ケルト」「答エルト」においても全員がそれぞれ②，③型であり，名古屋および岡崎と一致した。

3.3 連接形（～ニ行く）

I連接形では，一類動詞・二類動詞ともに名古屋／岡崎のアクセントの違いが指摘されている[2)]。アクセントの違いだけでなく，名古屋では「<売リニク，受ケニク>のように聞こえ気味の発音」（山口 2003: 125），岡崎では「売リーイク」「負ケーイク」（山口 2003: 121）のような語形の違いもあるという。連用形で助詞ニを伴って目的を示し，「～に行く」の文に入れて調査した多治見での結果は，表9のとおりである。ただし，助詞のニと「イク」の語頭音が縮約して「～ニク」のような名古屋式の発音になるものも含む。山口 (2003) から作成した表2およびこの表9では，内輪式の列で多くの語に無核型と有核型の双方が挙げられており，同書にその表示の意味は記されていないが，山田 (1987) でも両型が挙げられており，ゆれを示すと見られる。山田 (1987) の名古屋についての記述によれば，二類動詞に助詞ニの付く連接形

のアクセントは「さらに複雑」とのことで2～3の型の間でゆれがあり，それぞれの型について新旧の印象があるという。表9では，名古屋に2つ挙げられているうちのいずれかの型と岡崎の型が同じで，多治見でその型が現れた場合，多治見の右列に入れておく。

表9　I連接形：一類・二類動詞[3)]

語類	活用	拍数	調査語形	名古屋	多治見			岡崎
一類	五段	2拍語	売リニ	⓪		NA1	② 33	②
		3拍語	歌イニ（囲ミニ）	⓪		② 1	③ 33	③
		4拍語	働キニ	⓪		③ 19	④ 14	④
	一段	2拍語	着ニ	⓪①	① 33	② 1		⓪
		3拍語	入レニ（負ケニ）	⓪②	② 33		⓪ 1	⓪
		4拍語	並ベニ	⓪③	③ 30	② 4		⓪
二類	五段	2拍語	書キニ	⓪①	⓪ 1, ① 32		② 1	②
		3拍語	頼ミニ	⓪②	② 34			③
		4拍語	動カシニ（集マリニ）	⓪③			③ 34	③
	一段	2拍語	見ニ	⓪①			① 34	①
		3拍語	受ケニ	⓪②			① 34	①
		4拍語	答エニ	⓪③		② 28	③ 6	③

表9から，多治見では全体として有核型が多いことがわかる。特に一類五段動詞は岡崎と同じ型が多数を占める中で，4拍語「働キニ」はやはり独自の③型を示す人が多い。逆に一類一段では，名古屋のみに挙げられている有核型が多治見で大多数を占めている。

二類五段動詞では，「書キニ」「頼ミニ」では名古屋にのみ挙げられたそれぞれ①型，②型が大多数を占める。二類五段「動カシニ」の③型と二類一段「見ニ」の①型は，岡崎の唯一の型であるが，名古屋にも挙げられている型である。二類一段「受ケニ」では，岡崎と一致する①型である。4拍語「答エニ」のみは，どちらにもない②型が多数を占めている。これは，3.5節で見る他の連用形（F過去形，G中止形，H中接形）と同型である。

まとめると，多治見のI連接形は全体として中輪寄りとも内輪寄りとも言えず，語のタイプによって分かれるようであるが，名古屋・岡崎のどちらと比べても有核が多く，他の活用形と一致する傾向がある。また，山田（1987）が名古屋について指摘したような複雑さはなく，特に2・3拍語では市内の一致率が高い。

3.4 希望形（～タイ）

M希望形は，一類動詞では内輪式＝有核，中輪式＝無核の違いがあるとされる。多治見での一類動詞の調査結果は表10のとおりであり，この点では内輪式のアクセントを持つとみられる。

表 10　M 希望形：一類動詞

活用	拍数	調査語形	名古屋	多治見		岡崎
五段	2 拍語	売リタイ	③	③ 34		⓪
	3 拍語	歌イタイ	④	④ 34		⓪
	4 拍語	働キタイ	⑤	⑤ 34		⓪
一段	2 拍語	着タイ	②	② 34		⓪
	3 拍語	入レタイ（負ケタイ）	③	③ 34		⓪
	4 拍語	並ベタイ	④	④ 34		⓪

二類動詞では名古屋･岡崎ともに有核（～タイ）であり，多治見でも，調査した「受ケタイ」「答エタイ」で全員がこれと一致した。

なお，多治見方言の特徴として連母音 /ai/ が長母音 [a:] として発音される（安藤 2013）ことから，人によって「売リタイ」が「ウリター」,「歌イタイ」が「ウターター」のようになることがあるが，連母音の発音の相違は，ここではアクセントに関わりがないようである。

3.5 過去形・中止形（～テ）・中接形（～テモ）

ここでは，一類の五段動詞のイ音便活用・非イ音便活用を共に調査語に含めた F 過去形，G 中止形（テ形），H 中接形（～テモ）を検討する。3 活用形いずれも名古屋／岡崎のアクセントが同じとされている語と異なるとされている語がある。

まず, 一類五段動詞のうち, 非イ音便活用動詞「売る」「歌う」「固まる／疑う」では, 名古屋･岡崎ともに，F 過去形と G 中止形で無核，H 中接形で有核（～テ˥モ）であり，多治見での調査でもほぼ全員がこの通りであった（南 50m のみ F ウタ˥ッタ②型，H ウタガ˥ッテモ③型）。

一方，イ音便活用動詞では，3 活用形いずれも名古屋／岡崎の違いが指摘されている。多治見での結果は表 11 のとおりである。

表 11　F 過去形・G 中止形・H 中接形：一類五段イ音便活用動詞

活用形	拍数	調査語形	名古屋	多治見			岡崎
F 過去形	2 拍語	聞イタ（咲イタ）	①	① 21	② 10	⓪ 3	⓪
	3 拍語	注イダ（続イタ）	②	② 33	NA1		⓪
	4 拍語	働イタ	③	③ 25	④ 7	⓪ 2	⓪
G 中止形	2 拍語	聞イテ（咲イテ）	①	① 18	② 13	⓪ 3	⓪
	3 拍語	注イデ（続イテ）	②	② 33	NA1		⓪
	4 拍語	働イテ	③	③ 26	④ 6	⓪ 2	⓪
H 中接形	2 拍語	聞イテモ（咲イテモ）	①	① 20	② 11	③ 3	③
	3 拍語	注イデモ（続イテモ）	②	② 33	NA1		④
	4 拍語	働イテモ	③	③ 25	④ 8	⑤ 1	⑤

多治見では表 11 全体として名古屋と同じ型が多く見られる。その中で，2 拍語「聞く」の②型すなわちキイ┐と 4 拍語の④型すなわちハタライ┐もしくは長音化してハタラー┐というアクセントが 3 割ほど現れている。特殊拍にアクセント核がある形となっているが，この型は市の中央～東部（精華･共栄･養正･昭和小学校校区）には少なく（12 名で計 4 語形），南部（市之倉・滝呂・笠原小学校校区；10 名で計 17 語形）や北西部（南姫・根本・小泉・池田小学校校区；12 名で計 27 語形）に比較的多く見られる。

次に，一段動詞を一類･二類まとめて検討する。この中では，一類の 2 拍動詞「着る」のみ，3 活用形でいずれも名古屋・岡崎が同じアクセント（F 過去形と G 中止形で⓪型，H 中接形で②型）を取り，多治見でも 1 名（養 52f）がいずれも①型で発音したのを除いて全員がこれと同じであった。

他の一段動詞については表 12 のとおりである。多治見では，名古屋にも岡崎にも挙げられていないアクセント型は見られず，NA もなかった。3 活用形いずれも，一類 3・4 拍語と二類 2 拍語は，多治見において名古屋と同じ型が圧倒的に優勢である。一方，二類 3・4 拍語は岡崎にも名古屋にも現れる型がほとんどである。

表 12　F 過去形・G 中止形・H 中接形：3・4 拍一類一段動詞・2 ～ 4 拍二類一段動詞

活用形	語類	拍数	調査語形	名古屋	多治見		岡崎
F 過去形	一類	3 拍語	入レタ（負ケタ）	②①	② 30, ① 2	⓪ 2	⓪
		4 拍語	並ベタ	③②	③ 26, ② 6	⓪ 2	⓪
	二類	2 拍語	見タ	⓪	⓪ 25	① 8	①
		3 拍語	受ケタ	②①	② 3	① 31	①
		4 拍語	答エタ	③②		② 34	②
G 中止形	一類	3 拍語	入レテ（負ケテ）	②①	② 32, ① 1	⓪ 1	⓪
		4 拍語	並ベテ	③②	③ 30, ② 3	⓪ 1	⓪
	二類	2 拍語	見テ	⓪	⓪ 26	① 8	①
		3 拍語	受ケテ	②①		① 34	①
		4 拍語	答エテ	③②		② 34	②
H 中接形	一類	3 拍語	入レテモ（負ケテモ）	②①	② 30, ① 1	③ 3	③
		4 拍語	並ベテモ	③②	③ 30, ② 3	④ 1	④
	二類	2 拍語	見テモ	②	② 26	① 8	①
		3 拍語	受ケテモ	②①		① 34	①
		4 拍語	答エテモ	③②		② 34	②

ただし，山口 (2003) に基づく表 12 の名古屋の欄の中で，二類 3 拍語「受ける」の F 過去形･G 中止形の「受ケタ･受ケテ」は一類の「入レタ･入レテ」と同様に②①とされるが，山口 (1984: 15) では「1 類『借りる』と 2 類『起きる』は終止形は同じ②なのに，中止形過去形において

は②／①という区別が認められる」という，異なる記述が見られる[4)]。また，山田 (1987) では，一類「植える」の F, G は②とされ，二類「生きる」「建てる」の F，G について①，②のどちらも用いられるが①のほうが古いと述べられている。3 拍動詞の H 中接形についても，表 12 では②①だが，山田 (1987) では F，G と同様の記述となっている。また，4 拍一段動詞の F, G, H については, 表 12 で内輪式が③②であるのと同様に, 山田 (1987) も一類「重ねる」も二類「助ける」も③～②型のどちらも用いられるとし，そのうち③のほうが古いという。これらの記述を参考にすると，3 拍語は，一類で②型，二類で①型が，4 拍語は③型が優勢もしくは本来型であるということになる。そうなると，多治見の一段動詞の F, G, H のアクセント型は，名古屋で新型であるとされる 4 拍二類「答える」の②型を含めれば，すべて名古屋と同じであることになる（このうち 2 拍一類「着る」と 3・4 拍二類「受ける」「答える」では岡崎とも共通している）。ただし，名古屋では「並べる」「受ける」「答える」の F, G, H 形でゆれが報告されているのに対して，多治見の現状ではこれらのゆれは比較的少なく，類の区別を保っている。

一方，多治見でゆれの目立つ項目は 2 拍二類「見る」であり，F, G, H 形では岡崎型 = 共通語型の①型が少数ながら見られる。調査対象者の中で 1940 年以降生まれの人に①型の使用が限定されることから，共通語化の兆しである可能性が考えられる。

ここで，山口 (2003) が挙げた追加項目のうち，本節に関係する F2（～タラ），F3（～タリ），H2 ～ 5（テ形 + α）について，F 過去形および H 中接形と比較しておく。

まず，F2 過去形の仮定形（～タラ），F3 並列形（～タリ）の多治見での調査結果を表 13, 14 に示す。F2，F3 の名古屋や岡崎のアクセントについては，山口 (2003) は記していないが，山口 (1985) によると岡崎でイ音便活用の「泣く」の F「泣イタ」⓪型，F2「泣イタラ」③型である。名古屋について記した山田 (1987) では，いずれの動詞も F2, F3 は F と同じ記述となっている（F ～タが無核で F2, F3 が～タ┐ラ，～タ┐リとなるものを含む）。

表 13　F 過去形と F2，F3：一類五段動詞

活用	拍数	調査語形	多治見
非イ音便	2 拍語	F　売ッタ F2 売ッタラ F3 売ッタリ	⓪ 34 ③ 34 ③ 34
	3 拍語	F　歌ッタ F2 歌ッタラ F3 歌ッタリ	⓪ 33, ② 1 ④ 34 ④ 34
	4 拍語	F　固マッタ F2 固マッタラ F3 固マッタリ	⓪ 34 ⑤ 34 ⑤ 34

イ音便	2 拍語	F　聞イタ F2 聞イタラ F3 聞イタリ	① 21, ② 10, ③ 3 ① 16, ② 15, ③ 3 ① 17, ② 12, ③ 5
	3 拍語	F　注イダ F2 注イダラ F3 注イダリ	② 33, NA1 ② 33, NA1 ② 33, NA1
	4 拍語	F　働イタ F2 働イタラ F3 働イタリ	③ 25, ④ 7, ⓪ 2 ③ 25, ④ 8, ⑤ 1 ③ 23, ④ 10, ⑤ 1

表 14　F 過去形と F2，F3：一段動詞

語類	拍数	調査語形	多治見
一類	2 拍語	F　着タ F2 着タラ F3 着タリ	⓪ 33, ① 1 ② 33, ① 1 ② 33, ① 1
	3 拍語	F　入レタ F2 入レタラ F3 入レタリ	② 30, ⓪ 2, ① 2 ② 31, ③ 2, ① 1 ② 33, ① 1
	4 拍語	F　並ベタ F2 並ベタラ F3 並ベタリ	③ 26, ② 6, ⓪ 2 ③ 29, ② 4, ⓪ 1 ③ 29, ② 3, ④ 2
二類	2 拍語	F　見タ F2 見タラ F3 見タリ	⓪ 26, ① 8 ② 28, ① 6 ② 29, ① 5
	3 拍語	F　受ケタ F2 受ケタラ F3 受ケタリ	① 31, ② 3 ① 33, ② 1 ① 34
	4 拍語	F　答エタ F2 答エタラ F3 答エタリ	② 34 ② 34 ② 34

全体として，山田 (1987) が名古屋について記したのと同様に，多治見でも F2，F3 は F と同じアクセントを持つと言える。

その中で，イ音便活用の五段動詞「聞イタ（ラ・リ）」「働イタ（ラ・リ）」では，F でも F2，F3 でも，音便によって現れたイにアクセント核を持つ型とその前に持つ型が共に目立っている。このイは，この地方の連母音の長母音化によって，「働いた（ら・り）」が「ハタラータ（ラ・リ）」のように引き音 /R/ となることもあるが，長母音化の有無にかかわらず，アクセントの位置は 2 通り現れた。これについては 4.1 節で改めて考察したい。

次に，H 中接形（～テモ）と，中止形＋補助動詞の接続による H2 持続形（～トル），H3 試行形（～テミル），H4 完遂形（～テシマウ），H5 受益形（～テモラウ）とを比較する。表 15，16 の名

古屋の列には山口 (2003) の記述に基づいてアクセントを示し，多治見での調査と語や形態が異なるものはそれを示す。名古屋の H3 は試行形ではなく「～テクル」の記述である。多治見の発音では，H5 が「～ムラウ」のようになることもあるが，「～モラウ」と区別せずに示す。

表 15-1　H 中接形と H2 ～ H5：一類五段非イ音便活用動詞

拍数	調査語形	多治見	名古屋
2 拍語	H　売ッテモ	③ 34	③
	H2 売ットル	③ 34	③
	H3 売ッテミル	④ 32, ⓪ 2	④～テクル
	H4 売ッテマウ	③ 1	③～テ˥マウ
	売ッチマウ	③ 20, ⓪ 5	
	売ッチャウ	③ 10, ⓪ 4	
	H5 売ッテマウ	⓪ 2, ③ 2	⓪～テマウ
	売ッテモラウ	⓪ 30	
3 拍語	H　歌ッテモ	④ 34	④
	H2 歌ットル	④ 34	④
	H3 歌ッテミル	⑤ 34	⑤～テクル
	H4 歌ッチマウ	④ 14, ⓪ 2	④～テ˥マウ
	歌ッチャウ	④ 17, ⓪ 3	
	H5 歌ッテマウ	⓪ 2	⓪～テマウ
	歌ッテモラウ	⓪ 33	
4 拍語	H　疑ッテモ	⑤ 33, ③ 1	⑤(始マッテモ)
	H2 固マットル	⑤ 34	⑤
	H3 疑ッテミル	⑥ 33, ③ 1	⑥～テクル
	H4 疑ッチマウ	⑤ 17, ⓪ 1, ③ 1	⑤～テ˥マウ
	疑ッチャウ	⑤ 12, ⓪ 4	
	H5 疑ッテマウ	⑤ 1	⓪～テマウ
	疑ッテモラウ	⓪ 24, ⑦ 1, NA5	

表 15-2　H 中接形と H2 ～ H5：一類五段イ音便活用動詞

拍数	調査語形	多治見	名古屋
2 拍語	H　聞イテモ	① 20, ② 11, ③ 3	①
	H2 聞イトル	③ 22, ① 7, ② 5	③
	H3 聞イテミル	④ 16, ① 12, ② 6	④～テクル
	H4 聞イテマウ	① 1	③～テ˥マウ[5]
	聞イチマウ	① 8, ② 7, ③ 1	
	聞イチャウ	① 11, ② 8	
	聞イテシマウ	② 1	⓪～テマウ
	H5 聞イテマウ	⓪ 2	
	聞イテモラウ	① 15, ② 10, ⓪ 7	

3 拍語	H　注イデモ	② 33, NA1	②(続イテモ)
	H2 注イドル	② 22, ④ 11, NA1	④
	H3 注イデミル	② 28, ⑤ 5, NA1	⑤～テクㄱル
	H4 注イジマウ	② 16, ④ 3, ⓪ 1	④～デㄱマウ
	注イジャウ	② 14	
	注イデシマウ	② 1, NA1	
	H5 注イデマウ	② 1	⓪～デマウ
	注イデモラウ	② 32, NA1	
4 拍語	H　働イテモ	③ 25, ④ 8, ⑤ 1	③
	H2 働イトル	③ 19, ⑤ 15	⑤
	H3 働イテミル	③ 22, ⑥ 11, ④ 1	⑥～テクㄱル
	H4 働イチマウ	③ 12, ④ 6, ⑤ 1	⑤～テㄱマウ
	働イチャウ	③ 13, ④ 3, ⓪ 1	
	H5 働イテモラウ	③ 25, ⓪ 6, ④ 3	⓪～テマウ

表 16-1　H 中接形と H2 ～ H5：一類一段動詞

拍数	調査語形	多治見	名古屋
2 拍語	H　着テモ	② 33, ① 1	②
	H2 着トル	② 34	②
	H3 着テミル	③ 34	③～テクㄱル
	H4 着チマウ	② 18, ⓪ 1	②～テㄱマウ
	着チャウ	② 14, ⓪ 4	
	H5 着テマウ	⓪ 3	⓪～テマウ
	着テモラウ	⓪ 32	
3 拍語	H　入レテモ	② 30, ③ 3, ① 1	②①(負ケテモ)
	H2 入レトル	② 18, ③ 16	③
	H3 入レテミル	② 19, ④ 14, ① 1	④～テクㄱル
	H4 入レテマウ	② 1	③～テㄱマウ
	入レチマウ	② 21	
	入レチャウ	② 15, ⓪ 1	
	H5 入レテマウ	② 1	⓪～テマウ
	入レテモラウ	② 30, ⓪ 3, ① 1	
4 拍語	H　並ベテモ	③ 30, ② 3, ④ 1	③②
	H2 並ベトル	③ 15, ④ 14, ② 5	④
	H3 並ベテミル	③ 24, ⑤ 6, ② 4	⑤～テクㄱル
	H4 並ベチマウ	③ 18, ② 3	④～テㄱマウ
	並ベチャウ	③ 16, ⓪ 1, ② 1	
	H5 並ベテマウ	⓪ 1	⓪～テマウ
	並ベテモラウ	③ 29, ⓪ 3, ② 2	

表 16-2　H 中接形と H2 ～ H5：二類一段動詞

拍数	調査語形	多治見	名古屋
2 拍語	H　見テモ	② 26, ① 8	②
	H2 見トル	② 31, ① 3	②
	H3 見テミル	③ 26, ① 7, ② 1	③～テクㄱル
	H4 見チマウ	② 14, ① 2	②～テㄱマウ
	見チャウ	② 16, ⓪ 3	
	H5 見テマウ	⓪ 1, ① 1	⓪～テマウ
	見テモラウ	⓪ 27, ① 5	
3 拍語	H　受ケテモ	① 34	②①
	H2 受ケトル	① 26, ③ 7, ② 1	③
	H3 受ケテミル	① 33, ④ 1	④～テクㄱル
	H4 受ケチマウ	① 23	③～テㄱマウ
	受ケチャウ	① 15	
	H5 受ケテマウ	① 1	⓪～テマウ
	受ケテモラウ	① 34	
4 拍語	H　答エテモ	② 34	③②
	H2 答エトル	② 22, ④ 11, ③ 1	④
	H3 答エテミル	② 31, ⑤ 3	⑤～テクㄱル
	H4 答エチマウ	② 16	④～テㄱマウ
	答エチャウ	② 20	
	H5 答エテマウ	② 2	⓪～テマウ
	答エテモラウ	② 34	

結果を見ると，まず，語形のばらつきがあるものがある。H4 完遂形では～テマウ，～チマウ，～チャウを選択肢として示したうえで自然な言い方をしてもらったが，～チマウと～チャウが多い。H5 受益形では～テマウと～テモラウを選択肢としたが，ほとんど～テモラウであった（ただし，調査で～テモラウを選択した人の中に，調査前後の自然な会話の中では～テマウが聞かれることがしばしばあった）。すなわち，名古屋でアクセントを区別して用いられている H4 ～テㄱマウと H5 ～テマウは，調査ではあまり現れなかった。

アクセントも，F，F2，F3 の場合とは違って，H の系列にはばらつきがある。H で語幹にアクセント核を持つ一類の五段イ音便活用動詞と 3・4 拍一・二類一段動詞は H2 ～ H5 で総じて H と同じ位置にアクセント核を持つ（H2「聞イトル」と H3「聞イテミル」のみ H と異なる型が多数派）が，H が～テㄱモとなる五段非イ音便活用動詞と 2 拍一・二類一段動詞は，H2，H4 では H と同じ位置で～トㄱル，～チㄱマウあるいは～チャㄱウとなるものの，H3 は～テミㄱル，H5 は⓪型というように，文末節の要素によってアクセントが決まる。

また，多治見市内での地域的な偏りが H3「入レテミル」「並ベテミル」に見られる。多数派は語幹にアクセント核を持つ型であるが，～ミㄱルとなる傾向が北西部に強い（入レテミㄱル北西部 12 名中 9 名，他 22 名中 5 名，並ベテミㄱル北西部 12 名中 5 名，他 22 名中 1 名）。さらに，

F ～ H と同じく，「聞く」「働く」の F2, F3, H2 ～ 5 でキイ┐, ハタライ┐の型が市南部や北西部に見られる。

3.6 強消形（～ヤヘン等）

共通語の連用形＋係助詞ハ＋シナイに相当し，強い打ち消しを表すとされる J 強消形は，地域によって語形が異なり, また一地域の中でも複数の語形のバリエーションがある場合がある。山口 (2003: 125) によれば, 名古屋では「着る」の場合キ┐ーセン, キエ┐センと 2 通りあるとされ, アクセントはこの①型と②型が挙げられている。このほか,「売レセン」（②型),「歌エセン」（③型),「受ケセン，受ケーセン」（②型),「答エーセン」（②，③型），の形が挙げられており, センの前が長母音の場合と短母音の場合がある。山口 (2003) において名古屋で 2 つのアクセント型が挙げられている語については，山田 (1987) もキ┐ーセン，キエ┐センなど語形の違いを伴うものとして両型を記載しており，どちらも用いられるものとみられる。また，岡崎については，山口 (2003: 121) において「売リャーセン」（②型),「負ケヤセン」（②型）に加えて, 一段動詞では「着リャーセン」(②型),「負ケリャーセン」(③型),「並ベリャーセン」（④型）ということがあると述べられている。

多治見方言の場合，五段動詞で /-aheN/ と /-jaheN/，一段動詞で /-RheN/ と / -jaheN/ のそれぞれ 2 通りがある。例えば五段の「売る」はウラヘン, ウリャヘンとなり, 一段の「着る」はキーヘン，キヤヘンとなる。多治見では一段動詞のみの調査を行なった。その結果は表 17 のとおりであるが, 複数回答した場合はすべての回答を集計し, 語形のバリエーションを左に示す（右 2 列の名古屋・岡崎は山口 (2003) による）。ただし，6 語とも～ヤ┐ーヘンないし～ヤーヘ┐ンという回答をした 1 名（市 31m）は，尊敬語の否定形である～ヤーヘンと誤解して発音したおそれがあるため, 表 17 から除外する。以下, /-RheN/ の形を R 形, / -jaheN/ をヤ形と略記するが, 表 17 では, 多治見の列のうち, R 形の～ ┐ーヘンとヤ形の～ ┐ヤヘンを「┐〇ヘン」の列にまとめ, R 形・ヤ形ともにヘンの直前にアクセント核があるものを「┐ヘン」の列にまとめるなどして示す。

表 17　J 強消形：一段動詞

			多治見			名古屋	岡崎
語類	拍数	調査語形	┐〇ヘン	┐ヘン	ヘ┐ン		
一類	2 拍語	着ーヘン	① 8			①②	②
		着ヤヘン	① 6	② 15	③ 6		
	3 拍語	入レーヘン	② 12			②	②
		入レヤヘン	② 11	③ 7	④ 4		
	4 拍語	並ベーヘン	③ 15	④ 1		②③	③
		並ベヤヘン	③ 13	④ 6	⑤ 1		

二類	2 拍語	見ーヘン 見ヤヘン	① 9 ① 29			①	①
	3 拍語	受ケーヘン 受ケヤヘン	② 15 ② 20	③ 1		②	②
	4 拍語	答エーヘン 答エヤヘン	③ 17 ③ 17			②③	③

まとめると，R 形ではキ˥ーヘン，イレ˥ーヘン，ナラベ˥ーヘン，ミ˥ーヘン，ウケ˥ーヘン，コタエ˥ーヘンのように /R/ の直前にアクセント核が来る。ヤ形では，二類ではミ˥ヤヘン，ウケ˥ヤヘン，コタエ˥ヤヘンのようにR 形と同じ位置が圧倒的に優勢であるが，一類ではキ˥ヤヘン～キヤ˥ヘン～キヤヘ˥ンのようにばらつきがある。

このばらつきには，次のような理由があると考えられる。内省だが，例えば，「あの子はこんなに寒いのに上着を着ない。」と描写するときにはキヤ˥ヘンであろうが，「あの子は厚着が嫌いだから絶対に着ない。」と断定する際などはキヤヘ˥ンのほうがふさわしく感じられる。このように，実用の会話の中では，強調の度合いやニュアンスの違いによって，ヘ˥ンのアクセント核が顕在化する場合としない場合があるということである。さらに，キ˥ーヘンの影響でキ˥ヤヘンとなることもあろう。また，本調査の分析では，キ˥ヤヘ˥ンのような 2 段下がりの場合は初めの下がり目のみをアクセント核として記述しているが，実際には，初めの下がり目の後でピッチが上昇し，もう一度ヘ˥ンで下がるという場合もあれば，ピッチが上昇することなく 2 段下がることもあり，ピッチの動態はさらに複雑である。これらの点については，イントネーションの問題と合わせて調査する必要がある。

名古屋・岡崎とは，語形が異なる部分があるため精密な比較とはならないが，キ˥ーヘン，キ˥ヤヘンの①型が名古屋にしかないことを除けば，多治見で優勢な型はいずれの語も名古屋・岡崎ともに用いられる型である。

3.7 接二（～マデ）・禁止（～ナ）・否定（～ン）

以下，3.9 節までで扱うのは，各類 3・4 拍一段動詞のみである。

本節では，C 接二（終止形と 2 拍助詞マデとの接合），K 禁止（終止形＋終助詞ナ），L 否定（未然形＋ン）について 3・4 拍一段動詞を見る。なお，L 否定形では読み上げてもらう際に選択肢として～ナイ，～ンの両形を示したが，ふだんの話し方として～ナイを選択した人はいなかった。この 3 活用形は，山口 (2003) によると二類動詞では名古屋／岡崎の違いがなく，3 拍語で②型，4 拍語で③型であり，多治見の調査でもほぼ全員がこれと一致している（C 接二「受ケルマデ」で 1 名（市 45f）が④型，L 否定で 3 名（3 拍語「受ケン」で笠 45m，南 50m，4 拍語「答エン」で精 44m）が共に⓪型）のみがこの点からの逸脱である）。一方，一類動詞はいずれも山口 (2003) において名古屋／岡崎で異なる結果が示されており（ただし，山田 (1987)

では名古屋のC, Lにおいて岡崎と同じ型との間でゆれがあり，Kで無核との間にゆれがあるとされる)，これを多治見における調査の結果と比較すると，表18のとおりである。

表18　C接二形・K禁止形・L否定形：3・4拍一類一段動詞

活用形	拍数	調査語形	名古屋	多治見			岡崎
C接二形	3拍語	入レルマデ（負ケルマデ）	②	②3		④31	④
	4拍語	並ベルマデ	③	③5		⑤29	⑤
K禁止形	3拍語	入レルナ（負ケルナ）	②			③34	③
	4拍語	並ベルナ	③	③3		④31	④
L否定形	3拍語	入レン（負ケン）	②	②2	NA1	⓪31	⓪
	4拍語	並ベン	③	③3	NA1	⓪30	⓪

表18から，3・4拍一類動詞のC接二形・K禁止形・L否定形のいずれも，多治見のアクセントは圧倒的に岡崎寄りであることがわかる。名古屋寄りのデータを示した若干の話者は固定しておらず，地理的な偏りも見られない。

次に，追加項目L2～L5（未然形接続）をL否定形と比較する。L2は否定の仮定形に共通語の「いけない，ならない」に対応する語形が接続して義務を表す形式，L3は否定の過去形（～ナンダ），L4は否定の中止形（～ズ）＋助詞ニ[6]，L5は否定の連接形（共通語～ナクテモに対応する～ンデモ）である。L2は選択肢として～ナカン，～ナアカン，～ナイカンを示し，よく言う言い方で読んでもらったが，選択肢以外の言い方も含めて，複数の言い方をするという回答はそのまま複数回答として算入している。

表19　L否定形とL2～L5：3・4拍一段動詞

語類	拍数	調査語形	多治見
一類	3拍語	L　入レン	⓪31, ②2, NA1
		L2 入レナカン	②18
		入レナアカン	②16
		入レナアカヘン	②1
		L3 入レナンダ	③33, NA1
		L4 入レズニ	②23, ③11
		L5 入レンデモ	④34
	4拍語	L　並ベン	⓪30, ③3, NA1
		L2 並ベナカン	③14, ②1
		並ベナアカン	③22
		L3 並ベナンダ	④34
		L4 並ベズニ	③32, ④2
		L5 並ベンデモ	⑤30, ③2, ④2

二類	3 拍語	L　受ケン	② 32, ⓪ 2
		L2 受ケナカン	② 17
		受ケナアカン	② 18
		受ケナイカン	② 1
		L3 受ケナンダ	③ 34
		L4 受ケズニ	② 29, ① 3, ③ 2
		L5 受ケンデモ	② 32, ④ 2
	4 拍語	L　答エン	③ 33, ⓪ 1
		L2 答エナカン	③ 16
		答エナアカン	③ 20
		答エナイカン	④ 1
		L3 答エナンダ	④ 34
		L4 答エズニ	③ 33, ④ 1
		L5 答エンデモ	③ 3, ⑤ 1

一類動詞では，無核の L に対して L2 ～ L5 は有核である。L2 と L4 は～ ˥ナ，～ ˥ズニのように語幹の最後にアクセント核が来るのが優勢（ただし L4 入レズニは②～ ˥ズニと③～ズ˥ニのゆれが見られる）であるが，L3 では～ナ˥ンダ，L5 では～ンデ˥モと核の位置にばらつきがある。二類動詞では，L3 に～ナ˥ンダがあるほかは L と同じ位置にアクセントを持ち，語幹のアクセントを維持する。

なお，山田 (1987) による名古屋の記述では，L3, L4 について記載があり，その優勢な型は多治見と同様である。

3.8 仮定形

共通語の仮定形＋接続助詞バに相当する D 仮定形は，山口 (2003) によれば，名古屋では「売リャ（エエ）」「着ヤー」, 岡崎では「売リャー」「負ケリャー」の形をとるという。同書の記述から，名古屋の形式は，五段活用動詞に付くときは子音語幹＋ /-ja(R)/，一段活用動詞に付くときは母音語幹＋ /-ja(R)/ であり，岡崎は五段で子音語幹＋ /-jaR/，一段で母音語幹＋ /-rjaR/ とみられる。どちらの方言でも五段動詞の D 仮定形はほぼ同じ（引き音が付くか否か）であるが，一段動詞の場合は名古屋で /r/ が入らず，岡崎では入るということである。ここでは，この /r/ が入る形をリャ形，入らない形をヤ形と呼ぶことにする。

丹羽 (1989) では，西三河の岡崎では五段動詞「取る」が to’jaa，一段動詞「見る」が mi’jaa と，共にヤ形になるとしており，山口 (2003) の記述とは食い違う。一方で東三河の設楽では torjaa, mirjaa と, 共にリャ形であり, これが山口 (2003) による岡崎の記述と一致する。丹羽 (1989) に名古屋についての記述はないが，名古屋市の北西に接する稲沢市と東隣に位置する長久手町では torja，mi’ja で，山口 (2003) による名古屋の形式のうち母音の短いものと同じということ

になる。山田 (2002) の名古屋方言の記述も，これと一致する。いずれにしても，一段動詞のリャ形は愛知県では東部の特徴ということになる。

多治見では，今回の調査項目ではないが，五段動詞では子音語幹＋ /ja/ が優勢であり，「売る」はウリャ，「書く」はカキャとなる。調査結果を見ると，一段動詞ではヤ形が優勢であり，例えば，「受ける」28 名がヤ形，6 名がリャ形，「並べる」は 25 名がヤ形，9 名がリャ形であった。リャ形は共通語の口語としても用いられるので，方言形としては名古屋と同じヤ形をとると言えるかもしれない。

多治見の D 仮定形は，末尾に /R/ が付いて「受ケヤー」のようになることもあるが，これを長ヤ形と呼び，「受ケヤ」のように末尾が伸びない形を短ヤ形と呼ぶことにする。なお，このうち長ヤ形は，命令形の代わりに多く女性に用いられたり，勧奨を表したりする形態ウケヤ˥ー等と文字上同形であるが，少なくとも二類動詞では D 仮定形はウケ˥ヤとなり，アクセントが異なる。

山口 (2003) の記述によれば，D 仮定形は，二類では活用の種類に関わらず名古屋と岡崎のアクセントが同じであり，一段活用動詞の 3 拍語では②型，4 拍語では③型である。多治見でも 3 拍語「受ける」で全員が同じく②型のウケ˥ヤであり，4 拍語「答える」では 2 名（笠 49m，小 55m）が④型，1 名（市 47m）が⓪型を示したほかは③型のコタエ˥ヤであった。

一方，一類では，山口 (2003) の記述によれば，名古屋では二類と変わらず，3 拍語「負ける」は②型のマケ˥ヤ，4 拍語「並べる」は③型のナラベ˥ヤとなるが，岡崎ではそれぞれ③型のマケリャ˥ー，④型のナラベリャ˥ーということになる。これと多治見の調査結果を比べたものを表 20 に示す。ここでは，アクセント核の位置の同じものを同じセルに入れつつ，ヤ形／リャ形，短形／長形の別に行を分けて示す（名古屋・岡崎の列ではそれぞれ山口 (2003) の記述による名古屋・岡崎のヤ形・リャ形に対応する位置に示す）。

表 20　D 仮定形：3・4 拍一類一段動詞

		名古屋	多治見			岡崎
拍数	調査語形		○˥ヤ ○˥リャ	ヤ (ー)˭ リャ (ー)˭	ヤ˥ー リャ˥ー	
3 拍語	入レヤ	②	② 7	⓪ 17		
	入レヤー				③ 6	
	入レリャ			⓪ 1		
	入レリャー				③ 3	③
4 拍語	並ベヤ	③	③ 16	⓪ 15		
	並ベヤー				④ 1	
	並ベリャ		③ 1			
	並ベリャー				④ 2	④

内訳を見ると，3 拍語では⓪型ヤ短形が多いが，ヤ短形は 3 拍文節であるので，実質的にこの⓪型は③型と区別されない。ヤ長形の③型とヤ短形の⓪型を同じものと見なすと，②型（ヤ短）：③（＝⓪）型（ヤ短・リャ短・ヤ長・リャ長）＝ 7：27 となり，アクセントは岡崎と同じ③（＝⓪）型が多数派であると言える。4 拍語でも同様に考えると，③型（ヤ短・リャ短）：④（＝⓪）型（ヤ短・ヤ長・リャ長）＝ 17：18 となり，こちらは拮抗している。これらの分布に特に地域的な偏りは見られない。

なお，山田 (1987) [7] は，名古屋の D 仮定形をすべて短形の子音語幹＋ /-ja/，母音語幹＋ /-ja/ で記述しているが，一類動詞の D 仮定形はどの語も /-ja/ にアクセント核を置く型（尾高型）と無核型の 2 種を挙げる。これについて，「接続語と一つのアクセント単位をなす時の焦点のあて方による」とし，次のように説明している。

イキャ┐エーワ。＜行けばいい。＞

ではイキャに焦点があてられており普通の言い方である。これに対して，イキャエ┐ーヨ＜行けばいいよ＞では焦点がむしろ後半にある。（山田 1987: 77-81）

つまり，後ろに「エー」等の語が置かれる場合を考慮して尾高型と無核型を併記しているわけである。本稿の多治見の調査では「D 仮定形＋帰れる」といった文の読み上げであり，「帰れる」は D 仮定形末尾より大きく下がって始まっているため，短形の⓪型はすべて尾高型とみなすことができるので，尾高と無核の違いはない。それでも，○ ┐ヤ型と尾高型とのばらつきが見られる現象については，山田 (1987) の指摘した焦点が関与している可能性があり，今後の調査が必要である。

3.9 未来形（～ウ・ヨウ）

意志形などとも称される E 未来形について，山口 (2003: 121, 125) では，名古屋で「売ロト思ウ」「歌オト思ウ」「見ヨト思ウ」など，五段動詞では /-o/，一段動詞では /-jo/ のように短母音を持つのに対し，岡崎では「売ロート」「負ケヨート」のように長母音を持つとされる（岡崎では「方言形割愛。」との記載がある）。しかしアクセントについては差異が指摘されておらず，一類動詞でも二類動詞でも 3 拍語は③型，4 拍語は④型とされる。一方，彦坂 (1987) では「…しようと思っていた」というときの下線部として，名古屋では「シヨート」「ショート」のような長母音を持つ形が挙げられ，岡崎でも「セート」など長母音を持つとされる。

多治見では，山口 (2003) の記述による岡崎と同様に長母音を持つ（以下，「オ長形」と呼ぶ）のが一般的だが，「ウロカシラン」（売ろうかしら），「イコカヤ」（行こうか）のように助詞カが後続する場合は短くなる（以下，「オ短形」）ことが多い。本調査ではカの後続しない「～と思った」というキャリア文に入れていることから，ほとんど長母音が現れている。ただし，意志を表す形としては，特に「～と思った」等が後続する場合，ウロー，ナラベヨー のほかに，

ウラスまたはウラシ（五段動詞語幹＋ /asu/ または /asi/），ナラベスまたはナラベシ（一段動詞語幹＋ /su/ または /si/）といった形式（以下，「ス形」）が用いられることがあるため，読み上げの際によく使うものを選択してもらった。[8)]

結果は表 21 のとおりである。すなわち，圧倒的にオ長型が多く，そのアクセントは名古屋・岡崎と同じく，3 拍語で③型，4 拍語で④型が優勢である。オ短形はナラベヨ˥，コタエヨ˥が見られたが，これはともに，南 41f の 1 名のものである。ス形も少数あり，オ長形と併用すると述べて両方発音した人がいた。ス形のアクセントは，3 拍語で②型，4 拍語で③型であった。

表 21　E 未来形：3・4 拍一段動詞

語類	拍数	調査語形	名古屋	多治見	岡崎
一類	3 拍語	入レヨー 入レヨ 入レス／シ	③負ケヨ	③ 31, ④ 1 ② 4（うち 2 名はオ長と併用）	③負ケヨー
	4 拍語	並ベヨー 並ベヨ 並ベス／シ	④	④ 32 ④ 1 ③ 2（うち 1 名はオ長と併用）	④
二類	3 拍語	受ケヨー 受ケヨ 受ケス／シ	③	③ 30, ④ 1, ② 1 ② 3（うち 1 名はオ長と併用）	③
	4 拍語	答エヨー 答エヨ 答エス／シ	④	④ 30 ④ 1 ③ 3	④

4. 考察

4.1 調査結果の概括

ここではまず，第 3 節で示した結果を整理する。多治見方言のアクセントは，一類動詞では，F 過去・G 中止形・H 中接形・M 希望形において内輪式の名古屋と一致し，内輪式と中輪式のアクセントが異なる語形では中輪式の岡崎と一致しない。また，I 連接形の一類一段・二類五段（1・2 拍）動詞もこれらと同じ傾向である。これに対し，I 連接形の一類五段動詞と，A 終止形の一段動詞・B 接合形・C 接二形・D 仮定形の 3 拍一類一段動詞・K 禁止・L 否定では，名古屋と岡崎が異なる語形では岡崎に一致するアクセントが多く見られた。このうち A と L を除くと，名古屋・岡崎のいずれかに有核が見られれば多治見では有核が多数派となっており，岡崎と比べても名古屋と比べても強い有核の傾向を示すと言える。

さらに，イ音便活用の五段動詞を見ると，一類「注ぐ」「働く」の A 終止形と B 接合形は，名古屋で無核であるが，多治見では有核の二類動詞と同じ型が相当数現れている。山田 (1987) は，名古屋では 3・4 拍一段活用の一類動詞「借りる」「与える」などの有核は若い人ほど多い

とし,「中高化」という用語を用いている。そしてこの中高化が3拍五段動詞の一部（「削る」「慕う」「探る」「握る」など）にも及んできていると述べているが，この変化がイ音便活用動詞にも起こりうるのか,多治見の「注ぐ」「働く」などにつながる変化なのかが興味深いところである。

また，一類「聞く」「働く」の2語がイ音便を示すF過去形・G中止形・H中接形では，特殊拍にアクセント核が来る型（「聞く」のキイ┐,「働く」のハタライ┐／ハタラー┐）が現れている点も，名古屋と異なる点である。音便のイ音ないし /R/ は特殊拍の性質を持つが，それにもかかわらずそこにアクセント核が来ることがあるということは，これがキ┐イ,ハタラ┐イ,ハタラ┐ーよりも古い型であると考えられる。地理的に旧中山道や鉄道などで他の地域とつながる中心部ではなく，北西部や南部にこのアクセントが多いこともこれを裏付けるかもしれない。また，そうであることによって，二類の「裂┐イタ」「ダ┐ータ（出した）」[9] と一類の「咲イ┐タ」「抱ー┐タ」が弁別される体系になっている。なお，同じイ音便活用でも「注ぐ」にその傾向が見られなかったのは，前述のように，この地域の人々にとって馴染みが少ない語らしいことがその理由として考えられる。

二類動詞では,名古屋と岡崎でアクセント型が異なるものがほとんど一段動詞に限られるが,名古屋で2つの型が挙げられているものもあり，比較は単純ではない。そのなかで，F過去形・G中止形・H中接形では，2拍語「見る」で多くが名古屋と同じアクセント型（F・G⓪型，H②型）を示すのに対し，4拍語「答える」では岡崎の唯一の型であり名古屋で新しいとされる型である②型となっている。その結果，多治見で優勢な型では，一段2拍の「着る」（一類）・「見る」（二類）では名古屋と同じく対立がないものの，他は対立を保てる範囲で内輪式のアクセントもしくは有核の型をとろうとしているように見える。

また，二類動詞のI連接形は，名古屋の優勢型と同じ型・岡崎と同じ型・どちらとも異なる型が多治見において混在しており，複雑な様相を呈している。一段動詞の場合と同様にすべて有核であるが，共に①型の2拍一段動詞の着┐ニイク（一類）／見┐ニイク（二類）を除くと，優勢な型が類によって異なり，アクセントの対立を保っている。

このほか，語形そのものが名古屋や岡崎と異なるものが多く選択された項目としては，J強消形の～ヤヘンがあった。

なお,本調査は多治見市内の地域差があればそれをとらえることを目的として設計しており,そもそも被調査者の性別や世代差を調べるための人数設定になってはいないが，その結果で言える範囲としては,性差･世代差ともに動詞アクセントにはほとんど現れなかった。2拍二類「見る」のF, G, Hに共通語化と見られる①型への流れがあるのが唯一の世代差である。地域差も，内輪式・中輪式の区別に関わるとされている項目で有意な差のあるものはないが，まとまった人数の地理的な偏りとしては次の点が指摘できる。

・一類動詞「働く」が種々の活用形で二類動詞のように有核になる傾向が，南部に強い。

・一類イ音便活用動詞のF過去形，G中止形，H中接形およびF2，F3，H2 ～ H5で，特殊拍の性質を持つイ音にアクセント核を持つ傾向が，北西部および南部に強い。

・H3「入レテミル」「並ベテミル」が～ミ˥ルとなる傾向が北西部に強い。

これらの点が内輪式・中輪式の区別や成立と関わるのか否かについては，さらなる議論が必要である。特に二つ目の点については，愛知県長久手町でサェー˥タ（咲いた）などが使われていることが知られており（山田 1992），市外の地域での広がりが興味深い。

4.2「非中輪的特徴」から見た多治見方言の位置づけ

前節で見たように，多治見市の動詞活用形のアクセントには，名古屋（内輪式）と同じものと岡崎（中輪式）と同じものとがある。各活用形の使用頻度の相違やさらなるバリエーション（例えばB接合形では助詞トのほかにデ，ニなどがつく語形）のことを考えると，3節の結果で内輪式／中輪式のどちらと同じものが多いかを単純に数えることには意味がないであろう。また，岡崎のアクセントはほとんどの活用形で東京と共通しており，先行研究との調査時のずれから多治見での共通語化（東京アクセント化）も考えられることから，岡崎と同じアクセントを示すことが必ずしも元来中輪式の性質を持っていたということを意味するものでもない。

そこで，山口 (2003) が挙げた内輪式の文節アクセント体系における非中輪的特徴（表3）に多治見の調査結果を当てはめてみると，やはり地理的に近い「[1]a 名古屋，岐阜」もしくは「[1]b 飛騨」に肉薄するレベルの内輪式らしさ（非中輪式らしさ）を持つと言えそうである。表3に多治見の欄を追加するとすれば，表22のようになる（[2] 以下の方言については既出のため省略）。

表22　内輪式諸方言の比較（表3への加筆）

	1	2-1	2-2 [10]	3	4
[1]a 名古屋、岐阜	○	○		○	○
b 飛騨	○	×		○	○
多治見	○	×		○	△？ [11]

ただし，山口 (2003) は表3を，内輪式諸方言の移行性分布を説明するものとして提示しており，多治見方言が内輪式の中でどう位置づけられるかを考えるためには，さらに語類の対立の保持／減少や文節アクセントの複雑さについて考察しなければならない。これについては稿を改める。

最後に，安藤 (2014: 55) では山口 (1992) をまとめた表19を試みに提示したが，これに現時点で加筆修正するならば，表23のようになる（形容詞については調査済みであるが，詳細は稿を改める）。表23の中で，3・4拍一類一段動詞終止形で土岐川右岸に（②），（③）とある

のは，この型（入レ┐ル，並べ┐ル）がわずかに見られることを示す。また，3.1 節で紹介した，これらの終止形が名古屋において有核となったのが過去形の影響による新しいものだという見方が正しいとすれば，表 23 最下段に追加した過去形こそ比較の対象とすべきであろう。

表 23　多治見方言の位置づけへの試論

	尾張型内輪（内輪式 A 型）	多治見 土岐川右岸	多治見 土岐川左岸	加子母村等（内輪式 B 型）	中輪・外輪
1 拍二類名詞	①	①	⓪	⓪	⓪
3 拍一類一段動詞終止形	②	⓪（②）	⓪	⓪	⓪
4 拍一類一段動詞終止形	③	⓪（③）	⓪	⓪	⓪
3 拍一類形容詞	②	②	②	②	⓪
4 拍一類形容詞	③	③	③	③	⓪
3 拍一類一段動詞過去形	②	②	②	②[12]	⓪

5. まとめ

本稿では，一般的な五段活用動詞・一段活用動詞のアクセントについて，多治見市の各小学校校区生え抜きの高齢層を対象に調査を行い，実態を明らかにした。その結果，中輪式の岡崎方言との相似もあるものの，山口 (2003) で「非中輪的特徴」とされる名古屋方言との共通点があり，1 拍二類名詞で内輪式の特徴を持つ他の諸方言と比較しても，内輪式としての特徴を多く備えていることがわかった。また，中輪式（岡崎）と同じ特徴を示す項目であっても，必ずしも共通語化とはみられない場合があることを指摘した。

安藤 (2014) で述べたように，名詞では 1 拍二類で多治見市内に地域差が見られ，およそ土岐川右岸が内輪式，左岸が中輪式のアクセントを示すが，3 拍語「力」は市全域で内輪式と見られる②型を示す。これに対して動詞では，内輪式／中輪式に関する明確な地域差はなく，一類一段動詞終止形について言えば右岸を中心にわずかに内輪式の型を示す話者がいるという程度である。市内でのゆれは名古屋に関する記述と比較すると少なく，市全体で名古屋あるいは岡崎と同じ型をとる項目が多かった。その中で，名古屋・岡崎のどちらと比べても有核の傾向が強いことも明らかになった。

今後，多治見方言における動詞のアクセントに関して取り組まなければならない課題は山積しているが，まずは次の項目から明らかにしていきたい。

・今回の調査で対象外とした，内輪式・中輪式同型の項目のアクセント。

・サ行変格活用動詞およびカ行変格活用動詞のアクセント体系。

・「参る」「帰る」などの語幹末拍が頭子音を持たない動詞のアクセント体系とキイ┐タ（聞いた）のようなパターンの地域的な関連。

・各動詞の語幹が持つアクセントの特性と，文節末要素（助詞・助動詞など）の持つ特性と

の文節アクセントにおける反映。

・山口 (2003) が指摘している文節アクセントの移行性分布の面から，類によるアクセント対立の減少とパラダイムの複雑化が周辺方言と比較してどの水準にあるか。

・ナラ˥ベト˥ル（並べている）のような 2 段下がりの現象の音声学的分析。

最後に，本調査に御協力いただいた調査対象者の皆様に，心より御礼申し上げたい。

注

1）山口 (2003: 117) によれば，東京では岡崎と異なり，一類動詞接合形は⓪型である。

2）山口 (2003: 117) によれば，一類五段動詞連接形は中輪式の中でも岡崎と異なり，東京では⓪型となる。秋永 (2001: (74)) でも，目的を表す場合には一段動詞が⓪型となるとされる。

3）二類五段動詞「動かす」は，イゴカ～のように語幹の母音が異なる発音もあるが，以下，ウゴカ～等と区別せずに示す。

4）山口 (1984: 14) のリストでは二類「起キタ・起キテ」が「①又は②」，「起キテモ」が「①又は③」，一類の「借リテモ」が③などの記載があるが，他の部分での記述と食い違う点がいくつかあるため，ここでは取り上げない。

5）山田 (1987) は名古屋の一類五段イ音便活用動詞の H4 のアクセントを，「咲く」はサェ˥ーテマウ，「探す」はサカ°ェ˥ーテマウ等としており，山口 (2003) の記述と異なる。

6）L4 の意味で～ストという形態が伝統的な多治見方言では聞かれるため，選択肢に入れたが，今回の調査でこれを選択した人はいなかった。

7）山田 (1987: 81f) によれば，名古屋の一類動詞「探す」「植える」「重ねる」の D 仮定形として，尾高型と無核型に加えて中高型サガ˥シャ，ウエ˥ヤ，カサネ˥ヤを挙げている。これは「平板から中高へ移行中であるために生じたもの」とのことである。

8）彦坂 (1987) では，「どう<u>しよう</u>かな」や，自分に言い聞かせるようなときに言う「早く<u>起きよう</u>」，さらに「…しようと思っていた」という場合について調査結果を地図化している。前 2 項のケースにおいてもス形やその系統と考えられる「セス」「セズ」「オキーズ」「オキズ」が愛知県の各地に点在しているが，特に「…しようと思っていた」というときには尾張地方と中濃・東濃地方に集中的に現れている。彦坂は，サ変動詞では，セーズ＞セース（ト），セス（ト）＞セシ（ト），シス（ト）の順で派生したと推定している。

9）「出す」などのサ行五段活用動詞も過去形「ダイタ」のようなイ音便形を経たものであろうが，多治見では人により長母音化して「ダータ」となる。共通語形で「ダシタ」と言う人もいるが，「ダイタ」とは言わない（安藤 2013）。

10）山口 (2003) の示した表 3 の 2-2「3・4 拍一段動詞 2 類が部分的（FGHI など）に同じⓃをとる。」という特徴は，「3・4 拍一段動詞 2 類」が何と同じⓃをとるのか，あるいは 3 拍語と 4 拍語で同じなのか，不明である。○や△となっている [2]a，[2]b，[3]，[5] の地域のデータを見ても，山口 (2003) に示された範囲では基準が読みとれない。2-1 と 2-2 の判定は相補分布しており，[1]a 名古屋・岐阜，[1]b 飛騨の欄は 2-1 のほうに判定が付き，2-2 は空欄である。多治見も 2-1 で判定できるので，2-2 欄は空欄としておく。

11）山口 (2003: 130) の言う表 3 の 4「四段動詞の 1 類のある種（例：咲く）が 2 類（例：書く）と部分的（FGHI など）に同型Ⓝをとる。」が，イ音便活用の五段動詞についての基準であるとすれば，本調査では五段動詞の二類について FGHI を対象外としたため，正確な判定はできない。ただし，内省では二類の 2 拍語「書く」は Fカ˥ータ，Gカ˥ーテ，Hカ˥ーテモ，Iカ˥キニイク，3 拍語「動く」は F イゴ˥ータ，G イゴ˥ーテ，Hイゴ˥ーテモ，Iイゴ˥キニイク，4 拍語「動かす」は Fイゴカ˥ータ，Gイゴカ˥ーテ，Hイゴカ˥ーテモ，I イゴカ˥シニイクのように一類の多数派と同じ型となる。なお，一類の少数派の「聞く」Fキー˥タ，「働く」Fハタラー˥タのように特殊拍にアクセント核が来る形は内省でも自然であるが，こ

れを二類には用いない。

12）加子母村等の過去形が②とあるのは，山口（1993: 68）で「負ケ┐タ」が挙げられていることによる。

付記

本研究は JSPS 科研費 25370427 の助成を受けたものである。

参考文献・資料

秋永一枝 (2001)「東京アクセントの習得法則」所収：秋永一枝編・金田一春彦監修『新明解日本語アクセント辞典』三省堂

天野成昭･近藤公久編著 (2003)『日本語の語彙特性』第 1 期　CD-ROM 版（NTT データベースシリーズ），三省堂

安藤智子 (2013)「多治見方言における連母音の長母音化について」『富山大学人文学部紀要』58: 23-60

安藤智子 (2014)「多治見方言における名詞のアクセント」『富山大学人文学部紀要』62: 23-58

奥村三雄 (1976)『改訂増補　岐阜県方言の研究』大衆書房

鏡味明克・横江美帆子 (1992)「名古屋アクセントの年層変化」『名古屋・方言研究会会報』9: 17-25

金田一春彦 (1974)『国語アクセントの史的研究―原理と方法』塙書房

金田一春彦 (1977)「アクセントの分布と変遷」『岩波講座日本語 11 方言』岩波書店 pp.129-180

金田一春彦 (1978)「愛知県アクセントの系譜」國語學懇話會編『國語學論集』第一輯　笠間書院 pp.1-19

柴田武 (1950)「愛知縣のアクセントの分布」『文字と言葉』刀江書院 pp. 267-312

杉崎好洋 (2005)「岐阜県大垣市赤坂方言の付属語アクセント」『名古屋・方言研究会会報』22: 9-21

杉藤美代子（研究代表者）(1990)『全国共通項目調査票 (1) 調査者用　改訂版』文部省重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究」

丹羽一爾 (1989)「愛知県長久手方言の動詞の活用」『名古屋・方言研究会会報』6: 47-58

彦坂佳宣 (1987)「愛知県方言の歴史ノート (3) 意志の助動詞について」『名古屋・方言研究会会報』4: 25-34

前川秀雄 (1957)「尾張方言と三河方言の対立に関する研究」日本音声学会編『音聲の研究』8 千代田出版印刷 pp. 209-222

山口幸洋 (1984)「愛知・岐阜のアクセント（1)」『名古屋・方言研究会会報』1: 7-19

山口幸洋 (1985)「愛知・岐阜のアクセント（2)」『名古屋・方言研究会会報』2: 13-23

山口幸洋 (1986)「愛知・岐阜のアクセント（3)」『名古屋・方言研究会会報』3: 15-26

山口幸洋 (1987)「岐阜県下のアクセント（1)」『名古屋・方言研究会会報』4:10-24

山口幸洋 (1992)「岐阜県下のアクセント（6)」『名古屋・方言研究会会報』9: 43-54

山口幸洋 (1993)「岐阜県下のアクセント（7)」『名古屋・方言研究会会報』10: 57-68

山口幸洋 (2003)『日本語東京アクセントの成立』港の人

山田達也 (1987)「名古屋方言における動詞変化形のアクセント（その 1)」『名古屋・方言研究会会報』4: 63-84

山田達也 (1992)「長久手町若年層のアクセントについて」『名古屋・方言研究会会報』9: 1-16

山田達也 (1999)「名古屋地方における大学生のアクセント」『名古屋・方言研究会会報』16: 1-10

山田達也 (2000)「尾張・三河境界南部域におけるアクセントの分布」『名古屋・方言研究会会報』17: 11-40

山田達也 (2002)「名古屋方言における動詞変化形のアクセント（その 2)」『名古屋・方言研究会会報』19: 33-58

山田達也・正木悦子 (1999)「名古屋地方における大学生のアクセント」『名古屋・方言研究会会報』10: 1-9